

「錬られ、清められ、白くされるため」

ダニエル 11 : 31 - 35

April.25.2021

ダニエル 11 : 31 - 35 (パワポ)

Preface

キリストを信じる信仰には、迫害が伴います。

命を失うほどの迫害から、村八分にされる迫害、自分が属している組織からの迫害、家族や友人から理解されない迫害まで、その程度や外見に違いはあれど、必ずと言っていい程、迫害が伴うのがキリストを信じる信仰です。

主イエス様も新約聖書の中で、まことの神を信じ、キリストを信じ真に生きようとするならば、必ずと言っていい程迫害があるとおっしゃいました。

ただし、迫害を受けるためには、条件が伴います。

それは、与えられた信仰を置かれた人生の現場で反映させながら生きようとする事です。

イエス様のことを人前で知らないと言わず、知っていると言公言することが、迫害を受けるための必須条件です。

イエス様の言葉を見てみましょう。

マタイの福音書 10 : 32 - 40 (パワポ)

主イエス様を人前で認めながら生きることは、波風を立たせる程度のことでなく、剣をもたらずことであるとおっしゃいます。

信仰ゆえに命を差し出すこともあり得ると言うのです。

なぜ、そんなことが起こるのか？

それは、世が唯一まことの神の存在を認めたくないということに動機に回っているからです。

さらに言えば、神の前であって、我々人間に罪悪があるということを認め跪くことなんか到底受け入れることも出来なければ、理性的でもなければ、知的でもなければ、合理的でもないと思うからです。

要するにプライドですね。

永遠の滅びに対して何の力も発揮することの出来ないにもかかわらず持ち続ける人間のプライドゆえに、まことの神を第一にして生きたいと思う者たちが目障りに感じてしまうわけです。

私という人が主体となって利用できる神ならばいいですが、神が主体となって私という人がその方の思いに従うということはしたくないんです。

これが偶像礼拝です。

Part One

ここでひとつ皆さんに質問をします。

神が先でしょうか？ 人が先でしょうか？

言い換えますと、神が人を造ったのでしょうか？ 人が神という存在を作り上げたのでしょうか？

聖書は神が先だと教え、それこそ真理であり、現実だと教えます。

しかし世は、人が先で、人の願望を叶えるために作り出したのが神だと言います。

つまり、世の中が主張し望む神々は、人の欲望であり、人の貪欲の現われです。言うなれば、人の貪欲の現われが、神々を祀り立てておきたい偶像崇拝です。人々の貪欲を解消したいがために、作り出したのが神々だということです。使徒パウロもコロサイ書3：5で「貪欲こそ、偶像礼拝の正体だ」と言います。

貪欲を満たしてくれるために祈願し、願望を叶えるために利用するならば、私たち人間のプライドも立ちますし、人の権威を落とすこともなく、世の中の流れに逆らうこともなく生きられると考えます。

そんな考えに染まっている世の中で、唯一まことの神を信じ、イエス・キリストを信じながら生きることは、所謂、私たちが考える平穩無事な平和に必ずしも繋がるとは限りません。

主イエス様を信じることは、究極の平和であり平安ですが、

人間の主権を明け渡し、神の御旨に従って生きたいというイエス様ゆえの平和平安を求めない世においてイエス様を立てることは、会社や学校や国家や社会という大きな組織のみならず、親や子や兄弟という最も近い関係においても、剣というこの肉体の命に係わる迫害をもたらしかねないとイエス様はおっしゃいます。

つまり、聖書の神を信じ歩むことと世が相反してしまうのは、至って普通のことであり、通常のことであるということです。

逆にすんなり受け入れてもらっているならば、それこそ奇跡であり、神の守り、恵み、導きとしが言いようがない特別なことか、

与えられた信仰を人生の現場で反映させながら生きようとしていることを諦

めているのか、少し端的に言いますとこのどちらかになるということです。

かと言って、信仰を人生に反映させようと生きることと、イエス様のことを知っていると公言することは強制ではありません。

喉元にナイフを突きつけながら、「言わないと殺すぞ」というものでは決してありません。

言うなど言われても、むしろ言わないことの方が不自然で、言わずにはいられないのが信仰です。

つまり、与えられた信仰を人生の現場で反映させながら生きたいと自然に思えるようになるのが、キリストを信じる信仰です。

また、信仰を反映させながら生きられる場を作りたいと思うのも、キリストを信じる信仰です。

行き着くところ、**イエス様ゆえ**に迫害されることが喜びになるのが、キリスト教信仰です。

変な話ですが事実、新約聖書の使徒の働きには、イエス様のことを宣べ伝えてはならないと言われ、むち打たれ迫害されたにもかかわらず、むしろ、イエス様ゆえに迫害される者と**やっとなれた**と喜んでいる使徒たちの姿が見られます。

Part Two

使徒の働き 5 : 40 - 42 (パウロ)

先ほど「迫害を受けるためには条件が伴う」と、出来れば普通は避けたいと思うのが迫害ですが、「迫害を受けるため」とあたかも迫害が良いものであるかのように表現しましたが、その理由が正にこの聖書箇所の内容です。

イエス様ゆえに迫害されるに値する者と**された**ことが、この上ない喜びとなっています。

彼ら使徒たちの姿を思い巡らしますと、不必要なものがすべてそぎ落とされたアスリートの体が思い出されます。

不必要なものすべてそぎ落とされた霊的状态と言えるでしょうか、「イエス様」がすべてです。

迫害を受けるために彼らがしたことは、置かれた人生の現場で与えられた信仰を反映させ、人前でイエス様を堂々と認めたことだけです。

それ以外のことに焦点を当てることなく、歩んでいただけです。

迫害されることを恐れ、人前でイエス様を認められず、方々に散っていった以前の姿とは全く違い、イエス様ゆえの迫害こそ勲章のように思えています。

だからと言って、理性を失い、知性もなく、平静を保つことの出来ない狂信者になったわけではありません。

むしろ以前よりも平安で、知恵に満ち、世の成り行きを霊的視点に立って見極めることの出来る信仰に堅く立てています。

では何でこんな風になれるのでしょうか？

彼らの修行の賜物でしょうか？

彼らの努力ゆえでしょうか？

彼らの鍛錬ゆえでしょうか？

彼らの決心ゆえでしょうか？

もちろん、彼らの信仰的決心も大きな要因のうちの一つですが、その信仰的決心へと導いたのが、聖霊です。

聖霊なる神様が彼らを満ちし、不必要なものすべてをそぎ落とし、大切なものだけのために生きられるようにお導きなされたのが、聖霊なる神様です。

まさに、イエス様ゆえに迫害されるに値する者となったのではなく、**された**のです。

聖霊なる神が、彼らを「イエス様がすべてだ」と変えました。

じゃ、「イエス様がすべて」ということは、狂信的でしょうか？

いや違います。

主イエスが我がすべてになるならば、それこそ理性的であり、知的であり、知恵に満ち、本物の愛と偽物の愛の区別が付き、滅びゆくものに命を懸ける人生ではなく、決して朽ちることのない天の宝に命を懸けられる者として生きたいと願い、そう生きるように導かれます。

これこそが、今日の説教題でもあるダニエル書 11：35 の「錬られ、清められ、白くされる」という御言葉の意味です。

「イエス様がすべて」になったために受ける迫害が、「錬られ、清められ、白くされる」ために用いられるのです。

Part Three

先週も触れましたが、今ダニエル書 11 章で、御使いガブリエルはダニエルに、アンティオコス・エピファネスという権力者によって、将来イスラエル民族に起こるだろう大迫害について告げています。

アンティオコス・エピファネスがエルサレムを占領した後、真っ先にしたのが、

神政国家（神が国家を統治する）であるイスラエル民族の霊的精神的支柱である神を礼拝するための神殿を汚すことでした。

神殿の出入りを禁じ、安息日を守ることが出来ないようにし、律法の書を焼き、ついには、神殿の中にゼウス神の像を立て、モーセの律法で禁じられている豚の肉を燃やし、豚の頭を掲げて、もし神殿に入りたければ豚の頭を拝み、口づけしてから入るように命じました。

そしてその背教行為を拒み、命を懸けて唯一まことの神を否定せず、信仰を守ろうとした者たちは、剣にかかり、火に焼かれ、無残に殺されていきました。

この者たちのことをダニエル書 11：32、33では、「自分の神を知る人たち」とか、「民の中の賢明な者たち」と言い現わしています。

ダニエル 11：31－33（パワポ）

（彼とは、アンティオコス・エピファネスのことです。）

今ここで、「自分の神を知る人たち」、または「民の中の賢明な者たち」の痛みと殉教が無駄死になることはなく、むしろ、彼らの語ることや生き様が多くの人を悟らせると言います。

では、何を悟らせたのか？

からだを殺しても、たましいを殺せない者たちを恐れるのではなく、たましいもからだも滅ぼすことの出来るいのちの創造者なる神を恐れることにこそ、まことのいのちがあることを悟らせました。

また、どんな不当な訴えや迫害や危険や剣や艱難や死に対しても、私達を愛してくださっているキリスト・イエスゆえに圧倒的な勝利者であることを悟らせました。

私達の日々の生活は、ある意味、この地においてこの肉体が滅ぼされることを恐れながらの生活であると言っても過言ではありません。

お金が無くなるのが怖いのもなく、病気にかかるのが怖いのもなく、事が上手く運ばないのが怖いのもなく、とどのつまり、お金が無くなって、病気にかかって、事が上手く運ばなくて、この体が滅びてしまうかもしれないということに恐れを抱いています。

「民の中の賢明な者たち」は、この肉体が滅びてしまうという事実を超越した復活と回復と永遠のいのちと滅びることのない体をお与えになる神を否定することの方が、遥かに恐ろしいことだということを知っていました。

実感としてそれを信じられたのです。

信じるというのは自発的な行いであると同時に、その自発性を遥かに凌駕しながら包み込む神の主権が働いています。

つまり、信じられるようになる神との人格的な出会いが与えられているということです。

神を信じる、キリストを信じるというのは、事実か事実じゃないか分からないけれども、とりあえずひとまず信じてみるという賭けやギャンブルではありません。

パスカルが「信じてみることにかけてみる」と言ったのは、もう何だかわけがわからなくなり自暴自棄のようになって信じてみたのではなく、確かな勝ちが見えているから信じたということです。

つまり、「実感としてこれは事実だ」ということが分かっているんです。

Part Four

で、ここからが問題です。

実感として分かっているにもかかわらず、神をあたかも知らないかのように不誠実に振舞ってしまうのか、

実感として分かっていることを隠さずに、その実感を誠実に表に出すのかは、私たちの自由意思に任せられている側面もあるということです。

アンティオコス・エピファネスが「まことの神を続けて礼拝するならば殺すぞ！　しかし、辞めるならば生かしてあげよう」という言葉を投げかけた時に、

神が神であられるという実感と事実を信仰によって表すか、「いや、殺されるくらいなら、事実を曲げてでも、その実感を押し殺してでも生き延びよう」と思うかは、神様は私たちに委ねてくださっています。

なぜならば、神と人とは血の通った人格的な関係であり、無機質な関係ではないからです。

子が、親を恥ずかしがらずに自慢げに「うん、これ俺の父ちゃんと母ちゃん！」と言ってくれることを親が望むように、

夫が妻を、妻が夫を「うん、これ俺の大事な天下に二つとない掛け替えのない奥さん！　うん、これ私の大事な天下に二つとない掛け替えのない夫！」と言ってくれることに心が喜ぶように、

神様も私たちにそんな姿を期待しておられるわけです。

私たちは神様にとって、どこかボタンを押せば「ハイ、ゴシュジンサマ、ワタ

シハ、アナタヲアイシテイマス」というようなロボットではありません。
(まあ最近のロボットは、こんなしどろもどろな言葉は発しません…)

与えられている自由意志をもって、その愛する気持ちを口にする、口に出来る恵みをいただいているわけです。

時には、愛する子供のために、孫のために、親のために、夫のため妻のために、友人のために、同僚のために、先輩後輩のために、人から怪しまれ、誤解され、見下されることもあるかもしれませんが、

でも愛しているがゆえに、馬鹿な子供のために、孫のために、親のために、夫妻のために、友人のために、同僚のために、先輩後輩のために、怪しまれ、誤解され、見下されても、それが誇りに思えます。

愛しているがためにです。

日本は一応、憲法で信教の自由を謳っている国ですから、クリスチャンであることをもって、命を狙われるほどの迫害は、まあ普通に生きていけばないでしょうが、

それに甘んじて、怪しまれず、波風立たせず、上手い具合に落としどころばかりを見つけながら、人生の現場に信仰を反映させたいとは特に思わない思えない信仰者として生きてしまう誘惑に陥りやすいとも言えるかもしれません。

そしていつの間にか、迫害を避けることを目的にした、信仰生活と称する宗教生活を送ってしまう恐れを抱えていますし、抱えていませんか。

Part Five

先の太平洋戦争の時代、日本政府は、天皇を神として拝まない者たちを警察が取り締まるという横暴が合法だとまかり通っていました。

そして、教会の日曜日の礼拝式では、天皇をたたえる国歌斉唱や皇居に向かってお辞儀をする宮城遥拝や日の丸が十字架と共に掲げられるようなことに、教会が甘んじてしまったことがありました。

さらには、日本政府におもねるように擦り寄り、朝鮮半島において天皇崇拝及び神社参拝を拒否した200名以上の牧師や長老たちが殺されていくことを良しとし、当然とした日本の教会指導者たちがいたことが歴史的事実として残っています。

一方で、神社参拝を拒否し、激しい迫害にあった美濃ミSSIONの信徒たちや、キリストの再臨を隠すことなく明かす信仰が治安維持法に違反すると投獄され、拷問の末に殉教したホーリネス教会の日本の牧師たちもいました。

このようなことを経験してきた現在の日本の教会について、土浦めぐみ教会も属している同盟教団の赤羽聖書教会の野寺博文牧師先生は著書の中でこんな風に言っておられます。

野寺博文師談

「最近特に考えさせられるのだが、日本の教会は天皇制の呪縛を今日どれだけ克服できているのだろうか。預言者の権威は果たして世に立っているのだろうか。今日どれだけの牧師が天皇制の抱える問題をはっきり講壇から説教できるのか。「日の丸・君が代」問題の深刻さを牧師はきちんと信徒に教えたのか。役員や信徒の反対を恐れて真理を説教できないのではないか。白黒はっきりしない説教しかできないのではないか。

戦時中に一度敗北した日本の教会は、今日に至るまで世と摩擦を起こさぬよう、迫害を受けぬように、何とか辛うじて惨めに細々と生き延びてきただけの「負け犬根性」抜けきらぬままなのではないか。こうした体質を根本から変えないことには、教会はこの先百年経っても、世にキリストの栄光をあらわせるはずがない。特に最近のテロ事件以来、世の中は急激に右傾化している。こんな時代に真理を語るなら、当然厳しい迫害を受けるであろう。村八分や殺されることも覚悟せねばなるまい。しかし、だからといって世と妥協するのでは戦時中の教会の二の舞である。時代が悪いならなおさらのこと、教会は世の常識や評判に降り回されることなく、神のことばである聖書から物事を正しく判断せねばならない。そして、あらゆる困難を耐え忍び、一死覚悟して神のことばを忠実に語らねばならない。主の苦難を避けて神に呪われる生き方はもうたくさんだ。

殉教者の精神にならい、主の苦難を喜んで耐え忍び、主のご意思を忠実に全うして、主に喜ばれたい。そして、子々孫々千代に至る祝福の土台を築き上げていきたいと心から祈る。」

「このような内容を目にしたたり聞いたりすると、いたたまれなくなる」と以前言われたことがありました。

確かに私自身もいたたまれなくなりますが、かと言って目をそらして、信教の自由が確保されている国に住んでいながら、いつまでも隠れクリスチャンをやっているわけにはいきません。

「長いものに巻かれていれば、まあいいじゃないか」という思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、クリスチャンこそ世を包み込む長いものを与えられている存在ではないでしょうか？

ヒムチアン師のメッセージにもありましたけれども、「金銀は私にはない。しかし、私にあるものをあげよう。ナザレのイエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい！」というものを持ってますよね！

もしくは、まあそれはそれ、これはこれとして生きて行きますか？
負担ですか？ 重荷ですか？

いや、大丈夫です。

キリスト者であることを表明して、それを土台にして生きるならば、主はわたしたちを練り、清め、白くし、キリストの名のために辱められるに値する者とされたことに、この上ない喜びを抱ける者へと変えて下さいます。

この肉体が減じる恐れよりも、
神の国に相応しい者と認められ、報いとして永遠の安息が与えられることに、この上ない真の喜びを抱ける者へと変えて下さいます。

Conclusion

私は、祈るような気持ちで教会のことをこんな風に思っています。

迫害を避けることを目的とする教会ではなく、イエス様の望まれることをなす上で迫害を受けることが必要ならば、イエス様ゆえに迫害と辱めを受けるに値する者とされたことを喜べる群れでありたい。

世に認められることを目的とする教会ではなく、世が認めざるを得ないキリストの光を放つ教会でありたい。

また、世や社会を見下す群れではなく、世に与えし神の一般恩恵を、謙遜に的確に見極め取り入れると同時に、世を変える神の特別恩恵を与えられていることを肝に銘じ、その恵みを分かち合う使命を全うする信仰共同体でありたい。

そしてついに、錬られ、清められ、白くされるキリスト者の群れでありたいと願っています。

最後に、使徒パウロの言葉をもって、メッセージを終えたいと思います。

「宝のすべてが隠されている主イエス・キリストを受け入れたのですから、キリストにあって歩みましょう。」

お祈りいたします。

祝祷：ダニエル書 11：35